

## 進行期パーキンソン病の通院・診療状況調査

報告者氏名 望月秀樹<sup>1)</sup>

報告者氏名 小仲邦<sup>1)</sup> 三原雅史<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup> 大阪大学医学部神経内科・脳卒中科

### 研究要旨（10～12ポイント程度）400字程度

特定疾患事業の見直しに伴い、難病患者への社会制度、研究事業、療養生活の整備がなされようとしている。パーキンソン病は初期から中期の診断や治療への注目がされやすい傾向があるが今後パーキンソン病の患者数が増えることが予測され、進行期の患者の通院や療養生活の問題点を明らかにする必要があると考えられる。我々は当大学病院におけるパーキンソン病進行期患者の症状、加療内容や社会制度の利用状況を調査した。その結果、進行期の重症パーキンソン病患者は訪問診療と並行した診療体制が取られていないことや身体障害者手帳を有している患者が決して多いとは言えず、利用状況の実態を把握する必要があると考えられた。外科治療後の患者の割合が多く、術後管理の必要性も兼ねて通院している可能性が考えられた。今後は通院が中止となった患者の追跡によるパーキンソン病患者の縦断的な療養状況の把握や地域差や医療圏による差異についても検討したい。

とあり、倫理面への配慮を行うた上で施行した。

### A. 研究目的

今年度より特定疾患事業の見直しがなされ、難病患者にとってよりよい社会保障制度の確立、研究事業、療養生活環境整備事業の推進が進められようとしている。パーキンソン病の経過は長期に渡るが、初期治療や維持期の治療が注目される一方で病状がさらに進行した段階では通院の困難さまたは必要とされる治療やケアの内容が異なり、その後の症状や治療などの経過が分からなくなることが多いと思われる。パーキンソン病のよりよい医療環境、在宅療養の体制を整備し、また医療の重複を避け、医療の経済的効率化を図るため、進行期患者の実態を把握し、問題点を明らかにすることが目的である。

### B. 研究方法

(倫理面への配慮)

当大学病院神経内科・脳卒中科に通院中の Hoehn & Yahr の臨床重症度分類 4度と5度のパーキンソン病患者の現状について患者の特徴や診療状

### C. 研究結果

Hoehn & Yahr の臨床重症度分類 3度以上のパーキンソン病患者が平成 22～25 年にかけて 233 人通院しており、このうち 4度と5度のパーキンソン病患者はそれぞれ 90 人、23 人で平均年齢は  $71.3 \pm 10$ ,  $73.5 \pm 6$  歳、罹病期間は  $11.3 \pm 5.4$ ,  $13.1 \pm 6.6$  年、当院通院期間  $7.4 \pm 5$ ,  $10.5 \pm 7$  年であった。就労状況はそれぞれ 15.7%, 0%、療養状況はそれぞれ自宅療養が 94.4%, 73.9%、施設入所または入院がそれぞれ 5.6%, 26.1%であった。往診を受けている者はそれぞれ 1名と 0名であった。栄養摂取状況は鼻腔栄養がそれぞれ 2名、0名、胃瘻増設が 1名、2名であった。身体障害者手帳を有している割合は 38.4%, 66.7%であった。介護認定を受けている者は 75.3%, 88.9%であった。定位脳手術後の患者は 16.9%, 8.7%であった。平成 25 年以降に通院が中止となった患者はヤール 4度、5度でそれぞれ 11名、5名であった。その理由としてヤール 4度では死亡が 1例(消化器癌)、主治医転勤に伴う転医が 5例、入院が 1例、施設入所が 2例、不明が 2例であった。ヤール 5度で

は他府県の総合病院への転医が2例、他府県の療養型病院への転医が1例、不明が1例であった。進行期に問題となる認知、うつ、幻覚症状、ウェアリングオフ、ジスキネジアについて調べた。認知症状ありがそれぞれ12.2%、30.4%であった。うつ症状ありがそれぞれ13.3%、17.4%であった。幻覚症状ありがそれぞれ8.9%、21.7%であった。ウェアリングオフありがそれぞれ60.7%、54.5%。ジスキネジアありは39.7%、31.8%であった。L-dopa製剤はヤール4度、5度でそれぞれ97.7%、95.7%使用されていた。ドパミン受容体作動薬はそれぞれ74.4%、65.2%で使用されていた。L-dopa製剤の使用量はそれぞれ $439 \pm 148$ mg/日、 $421 \pm 189$ mg/日であった。

#### **D. 考察**

当科通院中である進行期の重症パーキンソン病患者は概ね往診を受けておらず、鼻腔栄養、胃瘻造設患者合計5名おり、内科的管理が必要となる病期であるが訪問診療と並行した診療体制が取られていないことが分かった。身体障害者手帳を有している患者は決して多いとは言えず、利用状況の実態を把握する必要があると考えられた。外科治療後の患者が17名いたことから外科治療の術後管理の必要性も兼ねて通院している可能性が考えられた。

今後は進行期パーキンソン病患者の療養の状況把握を行うと共に、通院が中止となった患者の追跡によるパーキンソン病患者の縦断的な療養状況の把握や進行期患者で通院がより困難であると考えられる地域での療養状況など地域差や当院を含む大阪北摂地域における総合病院などとの比較による医療圏による差異についても検討することを課題としたい。

#### **F. 健康危険情報**

なし

#### **G. 研究発表**

(発表雑誌名巻号・頁・発行年なども記入)

#### **1. 論文発表**

なし

#### **2. 学会発表**

なし

#### **H. 知的所有権の取得状況(予定を含む)**

1. 特許取得 なし

2. 実用新案登録 なし

3. その他